

平成24年度愛知学院大学薬学部FDワークショップ報告書

井上 誠、櫛 彰、脇屋義文、田中基裕、武田良文

愛知学院大学薬学部FD委員会

I. ワークショップの概要

愛知学院大学薬学部の教育理念と目標を実現するために、薬学教育モデル・コアカリキュラムの改訂に伴う本学薬学部での教育の在り方について、薬学部全教員が共通の目的意識を持つことを目的として、薬学部FD委員会は、本ワークショップを企画した。FD委員会は本ワークショップの準備のため平成24年12月より準備を進め、以下の日程で本ワークショップを実施した。

(日 時) 平成25年2月22日(金曜日)

9:30～17:45

(場 所) 愛知学院大学薬学部4号館4201講義室、
4503～4506ゼミ室

(参加者) 薬学部教員

(テーマ) 「カリキュラムを考える」

(日 程)

開会挨拶 櫛学部長

講演 村木教務主任

「コアカリキュラムの改訂について」

オリエンテーション

第1部 グループ別セッション

「薬学部の教育理念と目標を実現するために」

第2部 グループ別セッション

「愛知学院大学薬学部カリキュラムの改訂」

総評・閉会・情報交換会

ワークショップは、参加教員38名を3班6グループに分け、意見交換の相手をグループ内からチーム内に広げる目的で、メンバーを変えながらオープンな雰囲気の下で全教員によって議論するワールドカフェを用いた。各セッション終了後に、各グループディスカッションの結果を発表し、総合討論を行った。

ワークショップ終了後情報交換会を実施し、全参加者間の交流を深めた。

グループディスカッションの風景



チームセッションの風景



総合討論の風景



II. 参加者名簿およびグループ編成

統括：

樋彰（薬学部長、応用薬理学講座教授）
村木克彦（薬学部教務主任、薬効解析学講座教授）

A班：

井上誠（タスクフォース、薬学部FD委員長、薬用資源学講座教授）
河村好章（微生物学講座教授）
鍋倉智裕（第2部テーブルホスト、薬剤学講座教授）
武田良文（薬化学講座准教授）
藤原泰之（第2部テーブルホスト、衛生薬学講座准教授）
巽康彰（第1部テーブルホスト、薬物治療学講座講師）
波多野紀行（第1部テーブルホスト、薬効解析学講座講師）
伊納義和（薬品分析学講座講師）

小川法子（製剤学講座助教）
鈴木由香（生体有機化学講座助教）
曾田翠（臨床薬剤学講座助教）
中島健一（薬用資源学講座助教）

B班：

加藤宏一（薬物治療学講座教授）
田中基裕（タスクフォース、生体有機化学講座教授）
山村恵子（臨床薬剤学講座教授）
山本浩充（製剤学講座教授）
恒川由己（第2部テーブルホスト、臨床製剤学講座准教授）
古野忠秀（第2部テーブルホスト、薬品分析学講座准教授）
上井優一（第1部テーブルホスト、臨床薬物動態学講座講師）
田邊宏樹（薬用資源学講座講師）

森田雄二（第1部テーブルホスト、微生物講座講師）
木村聡子（応用薬理学講座助教）
森田あや美（生体機能化学講座助教）
李辰竜（衛生薬学講座助教）

C班：

佐藤雅彦（衛生薬学講座教授）
杉山成司（疾患病態学講座教授）
脇屋義文（タスクフォース、実践薬学講座教授）
長田孝司（第2部テーブルホスト、臨床薬剤学講座准教授）
茂木眞希雄（第2部テーブルホスト、生体機能化学講座准教授）
梅村雅之（第1部テーブルホスト、実践薬学講座講師）
浦野公彦（第1部テーブルホスト、薬剤学講座講師）
大井義明（応用薬理学講座講師）
小幡徹（生体有機化学講座講師）
鈴木裕可（薬効解析学講座助教）
富田純子（微生物学講座助教）
服部亜衣（薬物治療学講座助教）

III. 第1部「薬学部の教育理念と目標を実現するために」の各グループ報告書

A班：報告者 鈴木由香

【概要】

まず第1、第2ラウンドで、World Cafe形式にて討論した。その内容をふまえ、第3ラウンドでグループディスカッションを行った。各テーマは下記の通りである。

- ・第1ラウンド「薬学部の教育理念・目標からどのような教育の在り方を想像するか」
- ・第2ラウンド「薬学部の特徴とすべきものは何か」
- ・第3ラウンド「薬学部の特徴を創出するためにどのようなカリキュラムが必要か」

以下に、第3ラウンドのグループディスカッションの内容を報告する。

【第1ラウンドのまとめ】

- ・教育理念・目標をみんなが理解しにくい。
- ・基礎と臨床をつなぐイメージ。
→早期からPBL等で疾患症例を導入し、基礎と臨床を関連付けさせたい。
- ・協働・共創という言葉から、コミュニケーション能力を高めていく必要性を感じる。
※現状：コミュニケーション能力や自分で伝える力が不足している。

→他学年、他学部、他職種との交流をもつべき。

→さらに… 他施設（医歯薬）との連携も必要。

- ・理念に「医療」が3回出てくるが、イメージが人それぞれ異なる。
→どうとらえるかで教育の在り方が変わってくる。
- ・医療薬学スペシャリストのイメージ：
ファミリー薬剤師（≒ファミリードクター）>>>スペシャリスト（専門薬剤師等）
- ・薬剤師以外の医療薬学スペシャリストを養成するために、目標設定を早めに行う。
- ・教育理念・目標が高すぎる。
→達成するためには薬学部附属病院、附属薬局を作ることが近道である。
→コミュニケーション能力の開発やファミリー薬剤師の育成にもつながる。
- ・教育理念・目標は、卒業する時点でこうあってほしいというもののだが、卒業後の姿にもつながるため、卒後教育にも力を入れるべきである。

【第2ラウンドのまとめ】

- ・卒業研究の一部として、医療系・臨床系の特徴を出す。
※例）複数の施設と携わる臨床試験や研究プロジェクトに参画する。
- ・薬学部附属病院、附属薬局を作る。
- ・病院で即戦力になるような学生を育成する。
- ・昔の大学院教育で学んだ学生たちのような、広い視野を持つ学生を育成する。
- ・愛知学院ならではの仏教系の特徴を生かしたい。
- ・成績上位の学生にアドバンテージ制度を導入し、モチベーションを向上させる。
→成績下位層のモチベーション向上にもつながる
- ・スペシャリスト（専門薬剤師）よりも、ファミリードクターのような薬剤師を育成する。

【第3ラウンドのまとめ】

- どのような特徴を出していくか。
 - ・薬剤師になるのは前提だが、早期に目標設定をさせて、薬剤師以外の医療薬学スペシャリストも増やしたい。
※そのために…
研究者の話を聞かせる等、薬剤師以外の仕事を提示する機会を早めに設ける。
→学生のモチベーション向上につながる。
- ・近辺の病院、薬局等の医療機関と連携し、早期

から現場を体験させる。

- ・早期に学生の興味にあわせて授業をアレンジする。

※例) コースを3つに分ける：1. 研究志向、2. 医療志向、3. 国試対策等

- ・ジェネラルの教育は根底にあるとして、アドバンスとしての教育を行う。

※例) アドバンス研究コース、アドバンス医療コースなど

一人1コースに完全に分けるのではなく、各コースの割合を変えて学習させる方策もあり。

アドバンス教育でも他施設（医療機関、研究機関等）に連携を含める。

- ・社会人として人格を形成させるために、昔の教養教育のような（金曜日の講義ゼロ等）、自由度のある教育をさせても良い。

○どのようなカリキュラムが必要か。

- ・早い段階で職種の広さを伝える。→薬剤師以外の選択肢を与え、就職の幅を広げる。

※早期体験学習の内容に、医療現場や工場の見学に加え、研究者の講演会や研究所見学、公務員の話の聞く機会も設ける。

- ・目標設定を早期に行う→モチベーション向上、多岐に渡る就職先

※カリキュラムとして、早期よりオプション的にアドバンスコースをつくり、学習者の進みたい道へ特化させ、早期より意識を植え付ける。

(例：研究コース→統計を学ぶ、論文の読み方を学ぶなど

臨床コース→早期に医療現場を学ぶ、薬局を作り地域密着体験をするなど)

- ・カリキュラムを調整し、自由な時間をもたせる。→社会人への準備段階となり、人格形成につながる。

B 班：報告者 上井優一

第1ラウンド「薬学部の教育理念・目標からどのような教育の在り方を想像しますか？」では、以下の意見が挙げられた。

- ・薬剤師だけでなく、医療薬学専門人を育成する。

- ・薬剤師になることを希望する学生が多いことを考慮すべきである。

第2ラウンド「薬学部の特徴とすべきものは何でしょうか？」では、以下の意見が挙げられた。

- ・本学の歯学部、歯学部附属病院と連携する。
- ・愛知医科大学病院と連携する。
- ・病院や薬局を所有する。
- ・卒業生の問題解決の場をつくる。
- ・研究に打ち込めるカリキュラムをつくる。

以上を踏まえ、第3ラウンド「薬学部の特徴を創出するためにどのようなカリキュラムが必要でしょうか？」では、以下の意見が挙げられた。

- ・実務実習時の学習内容を統一する必要がある。
- ・現状の早期体験学習では、病院や薬局で業務を見学しているだけであり、早期体験学習の充実が必要である第1ラウンドで「薬剤師になるという目標を失っている学生が多いと考えられる」との意見が出たが、これを解決すると考えられる。
- ・6年生時の特論数を削減したり、4年生時に講座配属することによって、卒業研究を充実させることができる。
- ・歯学部附属病院や愛知医科大学病院内などに講座をつくり、卒業研究を行えば、卒業研究の多様性が生まれ、臨床研究の充実につながる。

まとめとして、本学の特徴は歯学部やその附属病院、心身科学部を有していることであり、これらの教員や学生との交流は、「在学時からチーム医療を学ぶ」ことになると考えられる。さらに体験学習を2～4年時でも実施し、学生の主体性を育む教育環境が必要である。

C 班：報告者 梅村雅之

第1～第3ラウンドのグループセッションの結果、以下の意見が出ました。

- ・愛知学院独自の特徴を考える。入学者への特徴と在学生の特徴を分けて考えるべき。
- ・薬学部＝薬剤師養成なのか、それとも医療薬学専門人（薬学士、教育・研究が出来る人）を養成するのか。
- ・本大学の入学生は薬剤師志向、地元志向が強い。
- ・愛知学院しかない特徴を持った方がよい（高校生に選ばれる大学）。例えば、専門に特化することや卒後のフォローなど。
- ・学生の勉学意欲を早期に引き出すためには、難しいPBL（SGD）を早期に行った方がよいかも。

- ・6年制に合ったカリキュラムを作製したほうがよい。
- ・無駄を省く（授業の重複をさける）。
- ・早期に現役薬剤師とのコミュニケーションをとることによって学習意欲が高まるかも。
- ・コアカリは基本であり、特徴はそれ以外で出すべき。
- ・学生（低学年）に薬剤師への興味を持たせる。
- ・研究者の意識を持つ（リサーチマインド）。
- ・10-20年後の大学のあり方を考える。
- ・本大学の特徴としては、歯学部がある。
- ・心身科学部などとも連携し、医歯薬連携（解剖学実習）ももっととる。
- ・早期体験実習などを他学部と合同で行った方がよい。
- ・ハードの充実（病院や薬局を持つ）。
- ・実務実習教育を充実させる。
- ・専門薬剤師よりはジェネラリストの方が需要は高い。
- ・マナー向上（マナー＝大学の評判）。
- ・卒業生のマナーがいいという評判を作る。
- ・実務実習でそのイメージをつける。
- ・OB・OGが活躍しているので、手助けしてもらおう。
- ・教員と学生との距離は近いが、講座間のつながりが少し弱いのでは。
- ・質の高い研究が問題解決能力を身につけさせるため、研究能力も向上させる。

IV. 第2部「愛知学院大学薬学部カリキュラムの改訂」の各グループ報告書

A 班：報告者 波多野紀行

【第1ラウンドにおいて各班で出された意見】

- ・化学の授業が少ない。
- ・薬学英语が中途半端である。
- ・カリキュラムの順序が悪く（実習→講義）、講義間の繋がりが悪い。
- ・教員間の連携が悪い。
- ・他教科の内容がわかっていない。
- ・重複を認識すべき（長所にも成り得る）。
- ・基礎科目と臨床科目の横のつながりをもたせる。
- ・講義の順番が悪い。
- ・学生目線を取り入れる。
- ・講義の重要性を明らかにする。
- ・モチベーションを上げるために、現場の雰囲気を楽しむ授業を行う。
- ・上位の学生にも目を向ける。
- ・指導学生のレベル差に対応した講義を行う。
- ・コアカリと国試が離れすぎているのでは？
- ・コアカリを網羅できてないのではないかな？

- ・マナーが悪い。
- ・特論を有効活用すべき。
- ・2、3年のうちに国試を意識させすぎ。
- ・国試に直結した講義になり過ぎる。

【第2ラウンドにおいて各班で出された意見】

- ・授業が詰まっているので学生が学校に来る。
 - ・特論（区別化したテーマを意識すればなお良い）
 - ・解剖実習←歯薬の連携
 - ・教養（宗教学など。より有効に使えば良い）
 - ・国試対策・CBT対策が充実している。
 - ・講義の自由度が多い。
 - ・学生と教師のフレンドリーな関係

【第3ラウンドにおいて議論された内容】

①講義の内容について

1. 1年のうちに専門科目を行う。
 - 選択科目（アドバンス）を増やすことに繋がる。
 - 単位数を1.5とし、選択科目（選択必修）を増やす。
2. 選択科目について
 - 体験型学習を充実させる。（インターンシップ、早期体験）・・・職の楽しさを伝える。
 - 研究意欲を湧かせる講義を行う。
 - 研究室を訪問させる（早い段階で）。

②講義全体の流れについて

1. 新コアカリに対応したカリキュラムを再構築する。
2. 外部講師を呼べるようにする（スポットで講義可能に）。
3. 学生にインタビューしてカリキュラム（順番など）を組む。
4. 理解度が悪いところを、重複させていく。
5. 学年を超えた指導を行う。
6. 新しい先生が来られたら授業内容の摺り合わせを行う。

③その他

1. 講座配属を早くする（4年後期から）。
2. 成績上位者を伸ばすことで、下位者も伸びる。（上位者への奨学制度を普遍的に）

【まとめ】

教員間での話し合いは滞ることなく進み、活発な議論が行われた。ディスカッションを進行する上で、特

に大きな問題はなかった。

B 班：報告者 加藤宏一

第1ラウンド「現行カリキュラムの欠点」

第2ラウンド「現行カリキュラムの長所？今後、特色とすべきもの？」

第3ラウンド「現行カリキュラムの改訂？」

上記に関して、以下の問題点と対策（対策は→で記入）が出された。

欠点

- ・ 講義内容が重複している。
- ・ カリキュラムの見直しの実施がされていない（一貫性がない）。
- ・ カリキュラムに関する教員間のすりあわせが不足している。
- ・ 教養部との連携が不足している。
 重要であるから重複するのは？
 SBOが重複しても実際の講義内容では重複していない場合もある。
 →各担当教員でプリントや定期試験などを用いてすりあわせを実施する。
- ・ 科目名と講義内容の整合性をもたせる。
- ・ 科目間のつながり（早期体験学習－臨床－長期実習）をもたせる。
 →複数教員で1コマの授業を実施して関連づけさせる（病態と治療の話など）。
- ・ 学生にカリキュラムに関するインタビューを実施していない。
- ・ 特論が有効活用されていない（目的がわかりにくい）。
- ・ 国家試験対策講義が多い（長所にもなる）。

- ・ 学力のバラツキが見られる。
 →選択科目を拡張し、成績に応じた選択科目を実施する。
 下位だけでなく上位の学生を伸ばす。
- ・ 3年生までが時間的に厳しい。

長所

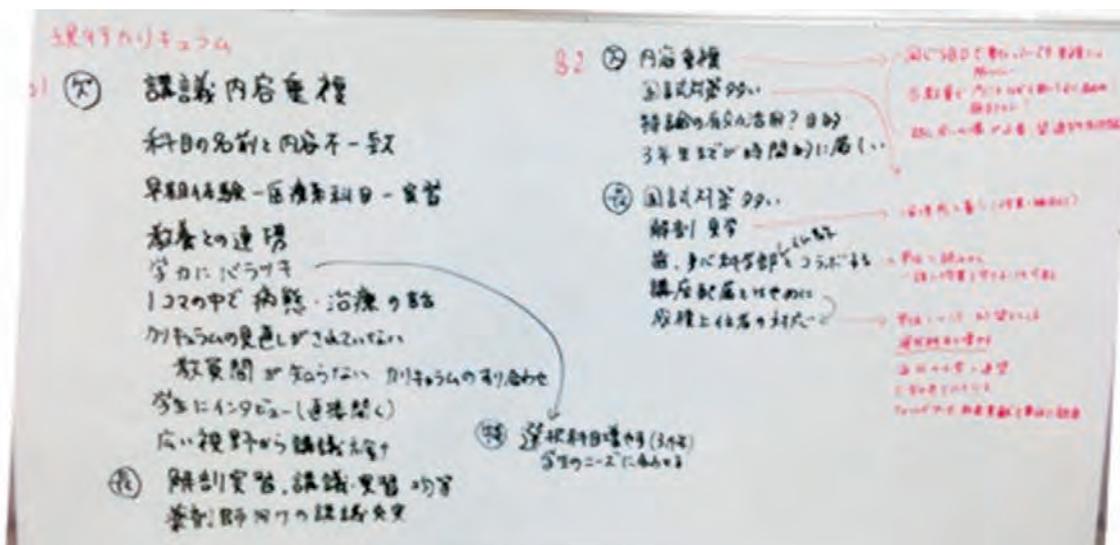
- ・ 解剖学実習（見学）がある。
 →見学だけでなく、人の死を考えることで倫理観の育成が可能となる。
- ・ 講義と実習の均衡がとれている。
- ・ 薬剤師向けの講義充実している。
- ・ 国家試験対策講義が多い（短所でもある）。
- ・ 歯学部・心身科学部との連携ができる。
 →他学部の講義の単位認定する
 早期に他学部の学生との合同授業（交流）を行う。

特色とすべきもの

- ・ 選択科目の拡張する（学生のモチベーションの維持に貢献）。
 →単位を1単位から1.5単位にして、講義時間の確保する。
 海外の大学と連携する。
 フィールドワーク・社会貢献を単位に認定する。
- ・ 成績上位者への対応
 → 講座配属をはやめる。

合同討論：

単位交換は、学部間で本当に可能かという質問がでたが、これに対する学部長の回答として、「大人数が授業がでいきる施設があるか？ 他学部の授業が、薬学部のコアカリに対応しているかどうかが問題であり、同じ授



業科目でも、各学部の授業時間が違う可能性もあるので、これらのことが解決できれば単位交換は可能かもしれないとのことであった。

また、具体的なフィールドワークの内容に関して質問された。

C 班：報告者 富田純子

1. 現行カリキュラムの欠点について

- ・教養との連携ができていない。
- ・現行のカリキュラムは4年制のものを元にしていて、6年制に移行してひずみが出ているが修正されていない。
- ・詰め込み式の学習を積み上げ式にするべきである。
- ・学生が授業の関連性を理解できていない。
- ・各講座への授業の割り振りのバランスがとれていないため、新コアカリに合った見直しが必要である。
- ・科目選択の面白さが無い。

2. 現行カリキュラムの長所について・今後特徴とすべきものは何か

- ・CBT対策、国家試験対策が充実している。
- ・歯学部と連携していく。

3. 現行カリキュラムをどのように改訂していくか

- ・90分授業（×15回）が1単位であるが他学部は2単位である。薬学部も1単位を1.5単位にして、選択科目を増やす（必須科目を振り替える）。ただし必須講義が減少すると、やる気がなくなる学生も出てくるので、うまく指導しなければならない。
- ・選択科目で研究、臨床について学べるようにする。
- ・意欲がある学生、上位成績者、下位成績者に合った指導が必要である。
意欲がある学生や上位成績者には、さらに成長できるような指導を行う。下位成績者には、大学での学習法を気付かせ成績を伸ばす指導が必要である。
- ・コアカリを満たす必須授業とアドバンス的な授業を行う。
- ・“気付き”体験をさせる（勉強法、授業のつながりを気付かせる）。
- ・早い段階で薬剤師の仕事内容について学ぶ。
- ・学生に様々な将来の方向性を見せる。
- ・外部講師の話聞く機会をさらに増やす必要がある。
- ・講義の重複が多いので、教員同士の連携が必要である（意図的な重複、積み上げ式の重複にする）。

- ・近い期間で重複するのではなく、期間を空けてもう一度学べるようにすれば、学生も関連づけることができる。
- ・基礎は縦、臨床は横断型の総合的な学習を行い、様々な視点から学ぶことができるようにする。
- ・6年生の特論を国家試験向けとそれ以外（研究向け）に分け、学生が自由に選ぶことができるようにする。
- ・学生が薬学セミナーにもっと参加できるようにする。
- ・他学部（医療経済学、宗教学、栄養学、心理学等）と連携し、総合大学であることを生かす。

V. アンケート

ワークショップ終了後、記名式にて以下の8項目についてアンケートを行い、その結果をFD委員会で集計した。アンケートの有効回答数は32であった。

1. 取り上げたテーマは、

適切である：29

不適切である：1

どちらともいえない：1

未回答：1

2. その理由を簡単にお答えください。

- ・コアカリの改訂にあわせて、今回のテーマで討論したことにより、現在のカリキュラムに対する先生方の考えや思いが分かり、今後カリキュラムを見直す際のヒントに繋がったのではないかなあ、と感じたからです。
- ・教育を考える機会になった。
- ・カリキュラムについて、理解していない部分があったが、ディスカッションすることにより理解が深まった。また、教育について考えるきっかけになった。
- ・薬学教育カリキュラムを考える良いきっかけとなった。
- ・少なくとも現状を認識できた。
- ・現在のカリキュラムの欠点が良く分かった。今後の改訂の含めて必要な時間であった。
- ・愛知学院大学薬学部がいかにミリオクのない、特徴のない大学であるかが認識できた。
- ・第1回目であり、中心的テーマと考えられる。
- ・切実なテーマで身近に考えることができ良かったと思います。
- ・ふり返りで自分の考えをまとめる良い機会となった

た第一歩です。

- ・愛知学院の方向性を年代の異なる教員間でディスカッションする良い機会でした。
- ・コアカリ改訂前であるため。
- ・時期的によいタイミングであった。
- ・新コアカリの対応に向けて、現行カリキュラムの改善点が確認できた。
- ・全員にとって喫緊の関心事であり、優先順位も高いと思われるため。
- ・身近なテーマである。但し、討議して得られた結果に関し、少しでも改善される可能性があれば、もっとactiveなものとなる。
- ・新コアカリが始まる（選択科目を増やせる可能性がある）のでタイミング的にいい。
- ・いろいろな偏り等が出てきていると感じていました。しかし、再編による教員への負担は大変心配です。
- ・コアカリキュラム改訂時期におけるカリキュラム見直しに対する意識向上、動機付けとなるため。
- ・みなさん、教育について色々考えられているんだと感心しました。
- ・カリキュラムはもう少し頻繁に見直したほうがいいと思う。
- ・漠然とした大きなテーマで議論しづらい。初回としては長時間だった。
- ・今の問題点をすべての先生が共有できたため。
- ・これまでに教員全体でカリキュラムに関する話し合いを持ったことがなかったのだ。
- ・1回目のFD委員会であり、ある程度抽象的な課題がふさわしいと考えたから。
- ・コアカリキュラムの改訂の時期と重なっている。完成年度も過ぎ、教育理念など種々のことを見直すのに良い時期。
- ・カリキュラム改訂に向けて段階的に議論できたため。セッションとラウンドで順々に進んで分かりやすかったです。
- ・教員全体で薬学部の教育について考えることは、非常に重要であると考えます。
- ・現行カリキュラムに対する問題点が明らかになり、新コアカリに向けての意識が高まったので良かったと思う。
- ・内容は適切であると思ったが、タスクフォースによる本題への誘導があると、なお良いと思った。
- ・教員がカリキュラムについて考える良い機会となったと思う。
- ・膨大な範囲で、抽象的意見しかないようなテーマ。

3. 今回用いたオープンカフェ形式は、

- やりやすい：29
- なじみにくい：2
- 未回答：1

4. オープンカフェ方式について意見を下さい。

- ・日頃、お話をしないような先生方と同じテーブルを囲み、最初はものすごく緊張しましたが、話が進むにつれて本当にカフェにいるような気分になり、とても意見を言いやすかったです。
- ・1ラウンドと2ラウンドは意見が出やすかったイメージはあるが、3ラウンドは少し雰囲気固くなった様な気がした。でも、多くの先生方の意見が聞けるので有意義であった。
- ・話しやすい、意見を言いやすい環境だったので良かったと思います。
- ・今回初めての経験だったので少々とまどった。メンバー固定式よりもオープンカフェ形式の方が多くの意見・視点に触れることができる点で参加者全員の意見を知ることができるので良い。一方で、グループ発表の内容がどのグループも似たりよったりになってしまう印象を受けた。
- ・話しやすく良い。
- ・話しやすく良かったと思います。
- ・オープンカフェもいいが、居酒屋形式ならもっといいのでは。
- ・初めての事でも特に支障はなかった。
- ・話しやすく、とてもやりやすかったです。
- ・分野の異なる先生方とも、意見交換ができた。これからだと思います。
- ・ワールドカフェ 1回、SGD2回 or 3回の方が良かった気がしました。今回、ワールドカフェにSGDの内容の影響が大きすぎて、グループ内の意見がスタートしづらいように感じました。記述しない先生がいましたので、もう少し説明があったほうが良いと思いました。
- ・発表はなくても良かったのではないかと思います。
- ・おもしろい方法であった。
- ・リラックスした自由な雰囲気で討論できるのは良いが、話がそれがちになる。司会者の腕次第。
- ・第1ラウンド、第2ラウンドの意見を基に話し合うので、第3ラウンドの班の議論に、特徴が出にくいのではないのでしょうか。特に今回のテーマは、教員が思っているところが似ているので。
- ・メンバーが固定されず、予想外の意見を聞く機会が得られた。自由討論ができ、とても良い。

- ・多くの意見を把握することが出来るので非常にいい形式だと思った。ただそれ故に発表内容が重複してしまい、発表そのものはあまりおもしろくなかった。
- ・にぎやか（セッション1,2）→ふつう（セッション3）→静か（発表）であったので、にぎやか→にぎやか→にぎやかにするために、今回は、アルコールがあっても良いかもしれない（内緒で）。
- ・ラウンド3がオープンカフェ形式から外れていたのので、ディスカッションの盛り上がり、1,2と比較して小さかったと思います。
オープンカフェ形式は、少人数で距離感も近く多くの意見が得られて良かったと思います。結論を求めていることも意見を出しやすかったのではなかったでしょうか。
- ・最初、システムについて理解できませんでした。
- ・5～6人がちょうどいいと思います。
- ・各ラウンドの内容を3ラウンドで集約できているので、合同発表はいらなくても（どこの内容も似たりよったり）。
タスクフォースが必要？
- ・1ラウンドと2ラウンドではいろいろな意見が出るが、3ラウンドで集まるとそれ以前のラウンドで出た意見が集約してしまい、それぞれの班の意見が似かよってしまった。
- ・様々な先生と話をすることができた。ただし、第1・2ラウンドに関しては隣同士が少し近かった。
- ・特に問題はなかった。
- ・ざっくばらんに議論できて良いと思う。
- ・少人数のため、話をしやすかったです。
- ・1つのラウンドの時間が少し短く感じました。議論が盛り上がってきたときに、「終了」という時が多々ありました。
- ・第1、第2ラウンドは発言しやすかった。第3ラウンドはコ型なので緊張感があったため、机を近づけた方が良いと思う。
- ・色々な人の話（他グループも含めた）が聞いて良いと思った。
- ・話しやすくして良いと思う。
- ・先生方が均等に交わるように工夫が必要。助教ばかりで集まると話がそんなに進まないです。

5. ワークショップを終えて、薬学教育に対する考え方が、

変わった：14

変わらない：7

どちらともいえない：11

6. その理由を簡単にお答えください。

- ・自分の今後の教育方針に関して考えることになった。
- ・現実的に難しい問題が多いため。
- ・今回は、大学のシステムのなごころの議論となつてしまったので、教員側の意識や工夫にも議論が及ぶと良かったと思うため。
- ・他の先生方と考え方がとても参考になった。
- ・自分自身でもいつも考えている内容のこと（同様のこと）を他の先生方も考えられていることが分かりました。
- ・薬学教育について考える貴重な機会となり勉強になりました。考え方が変わるということはなかったです。
- ・学部長や教務主任の講演が参考になった。また、他教員の意見が参考になった。
- ・様々な意見が聞けた。また、今ある制度の歴史を知ることができたから。
- ・新コアカリに対する考え、新カリキュラム改訂に関しては、考え方を再認識しましたが、教育に対してはあまり関わっていないのが現状です。
- ・それぞれの先生（基礎系 or 臨床系）が同じ意見を持っているため。
- ・もう少し回数を重ねていけば良い。
- ・いろいろな考えがあることが分かった。
- ・教えることは変わらないから。
- ・今までもコアカリキュラムに対しては注意を払っていましたが、あらためて認識させられました。
- ・今回だけでは具体性に欠けましたが、意見の共有ができたことに意味がありました。
- ・講義の形式（復習を多く行うなど）が参考になった。
- ・問題点の共有がはかれた。自分の講義の改善点／ヒントが得られた。
- ・考え方は変わったか変わらなかったか分かりませんが、すっきりしました。
- ・真剣に取り組むべき問題であるとあらためて認識できた。
- ・同じ意見の教員が多かった。
- ・具体的なカリキュラムを話し合っていないから。
- ・複数講座間の連携が今後カリキュラム改訂に向けて必要であることを再認識した（できた）。
- ・これまで考えていた事を発言できた。
- ・4年制から6年制に移行する時に大きく考え方を変えたので、そこからは変化していません。
- ・他人の意見をじかに聞けたので。
- ・今回のテーマから、すぐに薬学教育が変わるとは思えない。

- ・現状が良く理解できた。
- ・他のヒトが何を考えているか知ることができ、自分の主張がBestとは言えないことが分かったので、今後教育方針を変えたいと思った。
- ・今まで考えていなかったことを知ることができたので、自分の教育にも生かしていきたいと思ったため。
- ・理論（考え方）と実践（教え方）を結びつけるのは難しい。また、先生の理想（どのような学生を育てるのか）と学生の希望（どのような将来像を抱いているのか）は一致しているか不明である。

7. 今後FDワークショップで取り上げてほしいテーマがあればお書きください。

- ・どうすれば大学院にたくさん行かせるか。
- ・高校から大学で学び方が変わるので、そこを教える必要がある、との話が出たが、学習方法をいかに学生に伝えるか、その方法について。
- ・新コアカリについて。
- ・効果的な教育方法について。
- ・教育者に対する評価法について。
- ・今回はこれでよかったので、新コアカリの原案が出たら、新コアカリについてのワークショップになると思います。
- ・具体的に改革可能な内容を議論したい。
- ・学生の早期教育（1～2年生）について。
- ・効果的な講義・実習方法の取り組み。
- ・薬剤師の現場では、「Pharmacist , Scientist」や「科学的業務の構築」等言われています。薬学生にどのように「research mindを学ぶ場を与えるか」も必要と思います。
- ・今回のつづきを。
- ・具体的なカリキュラム再編。
- ・カリキュラム構築手順を全教員で考える。
- ・授業・実習の具体的な改善方法について。
- ・同じテーマでも繰り返すことが必要と思われる。
- ・FDワークショップを行う必要性について。
- ・国試対策のあり方。
- ・卒業教育のあり方。
- ・大学院教育・研究のあり方。

8. 薬学部FD活動について、意見を下さい。

- ・外で一泊して…。
- ・他の大学と（薬学部）合同FD委員会を行ったほうが、さらに色々な意見が出ると思う。
- ・今回、初めての試みだったが、良い活動だと思った。今後も教員間での議論をもっと深めていくことが

重要だと思う。

- ・FDの企画に参加することにより、薬学部の現状を知り、また、薬学部がこれから目指すべきものについて、考える非常に良い機会となっています。
- ・FD活動に参加させていただき、多くの先生方の考えに触れることで、大変勉強になりました。
- ・学生からの意見の集約を行うといった活動を通して、現状の教育の問題点を洗い出す。
- ・一定期間（1週間ほど）を設けて、自由にどの授業も見学できるとおもしろいと思う。
- ・委員の先生方の積極的な取り組みがなされていると思います。
- ・定期的に必要なと思います。
- ・年配の先生の講義を見学したい。
- ・より実効的になるように方策を考えてほしい。
- ・今後、定期的にコアカリの改定に伴って、カリキュラムを見直していくのに大変だと思います。ごころろさまです。
- ・たいへんよく活動されていると思う。
- ・FD委員の負担が大きいかなと思います。ご苦労様です。あまり協力できなくてすみません。
- ・activeだと思います。
- ・全教員が一同集まって、話し合う機会としてはいいかもしれないが、それがFD活動でなくてもいいかもしれない。
- ・学生のモチベーションどころか教員のモチベーションを上げることが大事。
- ・今回のWSの内容が反映されることを願います。
- ・今回のようなワークショップで得られた意見を実践に反映させるような活動になればと思う。

9. 今回のワークショップについて、自由な意見を下さい。

- ・良かった。疲れました。
- ・2. にも書いたように、各テーブルのタスクフォースにより、議論が本筋からはずれていないような操作があると、より良いワークショップになると思った。
- ・長時間のため半日程度の方がいいのではと思います。
- ・自由な雰囲気の中で、意見を言えたと思います。ただ、助教の立場では、（普段会議などに出ないため）薬学部全体のことを把握しきれていないため、的確に意見を言うことが難しいと思いました（分からないなりに発言し、すると、上の先生方がいちいち説明してくださるので、時間がかかってしまいました）。
- ・このFDワークショップの議論がどのように反映さ

れるのか知りたい。

- ・学生の方向性が定まっていないのは、学部の方
向性が定まっていないことが明らかとなった。
- ・もう少し短時間で回数を増やす。今回の内容を今
後どのようにして生かしていくのか。
- ・1～2年に1回ぐらいは行ったほうが良いと思う。
- ・先生方のご意見を伺えたことはとても有用であ
ったと思います。薬学部としての特徴を出すとい
うことの難しさをあらためて実感させられました。
今回の議論でも、歯学部や心身科学部、他の機
関などへの依頼など他力に頼らざるを得ない意
見も多く、独自の特徴を打ち出すことは難し
いと感じました。これからしっかりと考えてい
かなければならないことであると認識させられ
ました。
- ・みなさんの考えや思っていることが同じであ
り、安心しました。
- ・今回のオープンカフェ形式には多少慣れたので、
次回は1つのテーマ（ラウンド）時間がもう少し
長い方が良いと思う。
- ・良かったと思います（教員全体で取り組めた
点で）。しかし、今回のテーマ設定またはワ
ールドカフェ方式では、総評での樋先生の話
やその前の村木先生の話までは踏み込めな
かったように思います（4.でも書いたよ
うに）。
- ・今回のワークショップを通じて、教員の質の
向上と意識改革が重要であると感じた。
- ・樋先生の総括で言われたことは、おそらく4.
でも記述したが、ワールドカフェの話が入り
すぎたので、SGDの前にすこしプレゼンテ
ーションしてから入っていけば解決できた
気がします。
- ・初めての教員に関する教員間交流ができた
ことは収穫が多かった。これから、これは
第一歩です。
- ・大変でしたが、多くの先生の意見を聞く
ことができ、有意義なものでした。
- ・全教員が一同集まったことは良かったと思
う。
- ・最終的には目的が分かりにくく、どうい
う方向に進めばよいのか、ベクトルがバラ
バラでまとまりは無かった様に思う。
- ・教員個人個人が持っている教育に対する
思い、意見の交換ができて有意義なワー
クショップだったと思います。コーディネ
イトしていただいた先生方、ありがと
うございました。
- ・様々な意見を聞くことができたので、と
てもためになりました。
- ・定期的で開催しても良いのでは…。た
だ1日は長い。
- ・有意義な時間を過ごせました。ありが
うございます。

VI. 総括

これまで薬学部のFD活動は、外部講師によるFDに
関連した講演会を中心とした活動であった。6年制薬学
教育は薬剤師養成と薬学研究という2本の柱から成り
たち、授業科目のほとんどすべてが必修科目という特
殊性から、文系教育に携わる外部講師によるFDに
関する講演は、薬学部教員にとってほとんどなじ
めない状態であった。しかし、薬学教育に対する
第三者評価ではFD活動は必須項目であり、薬学
部FD委員会では愛知学院大学全学のFD活動と
は別に、薬学部独自のFD活動を模索してきた。
今回、平成26年度以降に改正される「薬学教育
モデル・コアカリキュラム」に速やかに対応する
ために、現行のコアカリキュラムによる本薬学
部の教育の現状を教員が相互に理解し、カリ
キュラムについて考える機会をもうけること
を目的として本ワークショップを企画した。
薬学部在職教員45名のうち平成25年3月に
退職予定の5名を除き38名の教員（出席率
95%）が本ワークショップに出席した。
薬学部として初めての試みであり、長
時間にわたり出席教員が自由な雰囲気の中
で意見を交換し、教員の学部教育に対
する真摯な姿勢が再確認でき、本ワー
クショップの大きな成果であった。しか
し、本薬学部の将来に向けた方向性が
定まっていない等の批判的な意見も
みられ、FD活動の成果を学生教育に
的確に反映できるよう、学部執行部
には期待する。予算的な裏付けが
ない状態で実施したため、大きな
テーマを短時間で検討することになり、
十分な成果が得られたとはいえない
が、初めての企画としては成功裏に
終わったと考えられる。今後は、
アンケートの結果を踏まえ、討
論等を十分にできるようにテーマ
を絞り、薬学部独自のFD活動
を展開していきたい。

（文責 田中）